



# 県中いわて

令和4年12月1日 / 第258号

●発行／岩手県中学校長会 ●代表／佐野 理（盛岡市立上田中学校）●事務局／〒020-0885 盛岡市紺屋町2-9  
(盛岡市勤労福社会館2F) / 電話・FAX 019(622)0572 ●ホームページ <https://www.iwate-jh-kochokai.jp/>  
●印刷／杜陵高速印刷 / 電話019(651)2110

## 『再びここから～ 結集・発信！スクラムいわて』 第58回県小・中学校長研究大会釜石大会が開催！

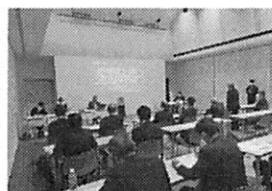
新型コロナウイルス感染症状況を懸念される中ではありましたが、10月7日(金)に「未来を拓き 豊かな社会を創造する子どもを育てる岩手の教育」の大会主題のもと、第58回岩手県小・中学校長研究大会釜石大会が釜石市民ホールTETTOを主会場に県内の小中学校長400名余が参加し、開催されました。



「コロナ禍ではあるが、子どもたちの学びと共に、校長の学びも止めない」との糸井好弘県小学校長の開会の辞で開幕し、午前中の全体研究発表に引き続き、午後からは分科会に分かれて熱心な協議

や情報交換が行われました。中学校の分科会は、教育課程・特別活動・生徒指導・学校経営の4分科会で構成され、分科会では各研究課題に基づき、それぞれ2地区の合計8地区から研究実践等を発表いただき、学び多き大会となりました。

本大会の開催にあたり、ご尽力いただきました釜石地区校長会の実行委員の皆様に本誌面を借りて感謝申し上げます。



## 第73回全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会

（大会主題）

### 「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」

10月20日(木)・21日(金)の2日間、「イランカラブテ 北の大地から 新たな学びを紡ぎ その先へ」の大会スローガンを掲げ、第73回全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会がZOOMによる完全オンライン方式で開催されました。本県からは県中役員や発表者を含む12名が参加しました。

第1日目の午前中は、開会式や文部科学省説明及び全体協議会が行われました。開会にあたり全日本中学校長会の平井邦明会長は「新たな時代の教育を推進すべく、高いこころざしをもち、「共に」を合言葉に取り組みを進めていきたい」と力強く述べられました。

午後からの分科会は、8つの研究協議題に分かれ、各々に2つの研究提案にもとづき、協議や情報交換が行われました。本県からは東北大会に引き続き花巻地区校長会の柏木廣喜校長が、「キャ

リア教育における『総合生活力』と『人生設計力』の確かな育成にむけて」と題し、第5分会において発表いただきました。

第2日目はアイヌ民謡・舞踏のアトラクションの動画配信で始まり、全体会・記念講演会をオンラインで視聴し、最後に次期開催地である大分県よりぜひ参集して開催しましょうとの挨拶で、2日間の大が開幕しました。



## 中体連・中文連だより

### 県中体連の活動



岩手県中学校体育連盟  
会長 橋場 中士（下小路中）

### 今年度の中文連を振り返って



岩手県中学校文化連盟  
会長 泉澤 敏（下橋中）

今年の県中総体は、9市2町を会場として7月16日～18日を主会期に6,453名が参加しました。中央開会式も県教育委員会教育長佐藤博様などをお迎えし、3年ぶりに開催することができました。本県開催の東北大会は4競技であり、東北大会全体での本県成績は、団体個人18種目の優勝となりました。

また、7年ぶりとなる全中大会が東北北海道ブロックで「咲かせよう君の花 北の大地とみちのくで」の大会スローガンのもとに開催されました。コロナ禍第七波のピーク時の中、本県では北上市で新体操が行われ、和賀地区中体連と県専門部の先生方や地元生徒補助員の献身的な仕事ぶりに対し、多方面から高い評価をいただき、素晴らしい大会となりました。加えて、水泳飛込競技が急速盛岡市で開催されました。

今年の全国大会での入賞は、第3位にホッケー競技男子川口・一方井中合同チーム、第5位にホッケー競技男子沼宮内中、ハンドボール競技女子矢巾中、陸上競技男子1500M菊池晴太さん（紫波第一）、第6位に水泳競技女子100M平泳ぎ三浦愛莉さん（福岡）と計5つとなりました。本人の努力とともに、顧問やコーチ、競技団体や県競技専門部の指導強化の賜物であり、その御尽力に敬意を表するものです。冬季種目の活躍も大いに期待しています。

終わりに、「運動部活動の地域移行」に関する提言が示され、スポーツ庁から日本中体連に対し、地域スポーツ団体等が大会参加できるよう仕組みづくりを進めることができます。本連盟では、県中学校長会や各地区中体連などとの密なる連携を図り、その望ましい参加の在り方等についての検討を進めてまいります。今後ともご理解とご協力をいただきながら、たくましく人間性豊かな中学生の育成に取り組んでまいります。

昨年度は、ご承知の通り、本県の中文連設立20年の節目であり、本県で2回目の開催となる全国中文祭が開催されたのを受け、今年度は新たなステージへと向かうべくスタートの年度と位置づけ、10年後の姿を見据え、どうあるべきかを考えながらも、通常の事業を推進してきた年度がありました。

中文連最大の事業である県中学校総合文化祭は、今年度は11月25日(金)に岩手県民会館において、「輝け岩手の文化 踏み出そう未来への一歩」のスローガンのもと、無事に開催することができました。

新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、舞台発表では保護者や一般の方の観覧は行わず、また各地区・団体等の座席の間隔をあけるなどの対策を講じての開催でしたが、出演した中学生も観覧した中学生も、お互いの文化活動についてあらためて見つめ直す機会となり、とても充実した時間を感じる素晴らしい機会となりました。そして、いつまでも岩手の中学生の文化活動の発表の場として、または交流の場として、総文祭は継続していかなければならないと、中文連として決意を新たにいたしております。

今、全国的に部活動の地域移行について、議論がなされておりますが、各学校に根づいている「学校文化」が消えることはありません。これからも中文連は各学校文化の貴重な交流の場として、邁進してまいいる所存です。



## GIGAスクール構想

### 「GIGAスクールの取組」

紫波地区 吉岡 裕見（矢巾中）



#### 1 はじめに

GIGAスクール構想は、「多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、子供たち一人一人に公正に個別最適化され、資質・能力を一層確実に育成できる教育ICT環境の実現」を目指している。紫波地区は、紫波町・矢巾町において、タブレット端末、アプリケーション、ネットワーク環境は異なるものの、一人一台端末と高速通信ネットワーク環境は整備され、基本的なICT環境は整っている。しかし、GIGAスクール構想を目指している、「学習活動の一層の充実・主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」については、模索している段階であると考えている。言い換えれば、生徒が端末を鉛筆やノートなどの文房具のように使いこなし、インターネットやアプリを利用し、得た情報を使って他者と交わったり自分自身の考えを深めたりする活動は、まだまだこれからである。

ICT活用を支える研修は、各々の町教委が主催する対面研修およびオンライン研修が随時行われており、約7割の教職員が参加している。もちろん、各町教委は、採用した端末に合わせた研修プログラムを工夫しているため、教職員にとって実効性が高く、その参加率の高さにも結びついている。

#### 2 ICT機器の活用

授業での具体的な活用について、紫波第二中学校坂本 大校長が行った調査・研究によると、ICT機器の活用を行っている教職員のほとんどは、「教師による資料や教材の提示」で活用しており、次に「イ



ンターネット検索による調べ学習」が、高い活用率であった。一方で、「アンケートや問題によるレディネスの把握」「教材、問題の配付回収」「グループの話し合いや情報共有ツール」「プレゼンテーションの作成や発表」といったGIGAスクール構想が目指している活用については、50%に満たない状況であることが課題となっている。

#### 3 今後の取組

前述したように、ICT機器の活用は少しづつ増えてきているが、生徒の「個別最適化」と資質能力の向上を前提とした活用には至っていない。紫波地区校長会として、GIGAスクール構想を目指す姿の実現のために研究や研修を進め、情報共有を行っている。

##### (1) 研修機会の確保

自治体や行政主導の研修機会に頼るだけでなく無く、各校での研修の工夫を行っていく。

##### (2) 情報教育担当スペシャリスト制度

情報教育担当業務を細分化し、複数のスペシャリストを校内で養成し、チームとして対応する。

##### (3) 実践の共有化

日常的に互いの授業を参観する校内体制を構築する。

##### (4) 教師の有効感の創出

校務への積極的活用を進める。

- メール活用・・教職員に公用アドレスの割当
- 会議のペーパーレス化・資料準備・打合の縮減
- 各種会議のリモート参加 等

#### 4 まとめ

生徒は、ICT機器に抵抗感が無く、話し合いや情報共有ツール、自分の考えを表現・発表するなど自分にあった方法で使うことができる。まずは、教職員の苦手意識や抵抗感を軽減する取組からはじめることも大切だと考えている。地区内には、ICTに苦手意識の無い若手職員が「タブレット委員会」を自立的に立ち上げ、教職員に様々な情報提供や活用支援を始めている学校も出てきている。

地区校長会として、全ての教職員が取り残されることのない校内体制をどのように作っていくかが今後の課題と考えている。

#### 参考資料

『GIGAスクール構想に係る教育課程のマネジメント～教職員の実態と効果的な実践研究をとおして～』 紫波町立紫波第二中学校校長 坂本 大

③

## 私の学校経営

### 「南中プライドの構築・発信」

胆江地区 佐々木教博（水沢南中）



## 私の学校経営

### 美しい心を伸ばす

一関地区 小田島達哉（平泉中）



本校は今年度551名の生徒数で県南でも有数の大規模校です。大人数の特色を活かし、研究においては各教科、複数の先生方がいることでの教科指導の充実を推進しています。また、生徒の活動では上級生が下級生に熱意を持って指導する運動会での男女別の集団演技、組団のパフォーマンス等、毎年、地域、保護者から素晴らしいと評価されています。更に、活気のある部活動でも大人数の良さを活かしています。本校の卒業生でもある大谷翔平選手の活躍もあり、伝統ある水沢南中学校にいるのだという自覚を持ち、学習や部活動、普段の生活もしっかりとやっていくという気持ち、「南中プライド」を教職員、生徒と共有し、構築・発信しています。

学校経営においては、

- 1 「校長のビジョンを教職員全員で共有し、生徒のために、一つの方向で組織的に進めること」と
- 2 「常に先生方との意識を共有すること」を重点として進めています。

本校の生徒像「自ら学び心豊かでたくましく生きる生徒の育成」を達成するために、本年度の重点を「自分から動く」「自信に思いやりを持つ」「正しいことをする」と設定し、生徒たちには「先手必勝のあいさつ」「仲間とともに」「命を守り正しいことを」を実践していくことを呼びかけています。先生方も生徒も意識することにより、成果が表れています。

また、教職員には生徒や保護者、地域の方々に日頃から「気配り」「心配り」「思いやり」を持って接し、温かい雰囲気をつくることを話しています。

校長室には「進みつつある教師のみ人を教うる権利あり」という書が飾っています。私が教師として採用になった時と、現在は教育環境が大きく変わり、今後も変化していくと思います。しかし、人を教育していくことは、何事にも代えがたい素晴らしい事だと思います。今後も、常に前に進んでいく気持ちを持ち、人を育てていきたいです。

さて、自分なりには2つのことに力を入れています。まずは本校の課題でもある不適応対応。どの学校も組織で対応しているとは思いますが、本校もいかに情報を共有して、組織で対応できるかがポイントだと思っています。具体的には、毎週火曜日（授業時間内）に主任による支援会議（情報交換）を行います。集まるのを優先とし、口頭での情報交換をしています。会議の内容は、次の朝までに校長または副校長が資料作成し、支援員を含む全職員に配布しています。なかなか伝達といってもその時間もないのが現状ですから、このような形で次の日には情報共有しています。また、担任や学年を中心に動きますが、その負担が増えないよう、支援員と管理職も学年をサポートするよう心掛けられています。少しではありますが、成果は出てきているかと思っています。

もう一つは働き方改革です。ペーパーレス会議や負担業務の分担など、他の学校でもされていることだとは思いますが、職員からアンケートを取りながら少しずつ進めています。根底には、自分がやってきて大変だったこと、嫌だったことを変えられるのであればという考えがあります。せっかくこの職に就いたのならば、今まで思っていたことをできる範囲で実現してみようと思っています。

まだまだ反省の方が多いですが、周りから指導・助言をいただきながら進めている日々です。

## 各地区校長会活動 NOW

### 岩手地区校長会



#### 学校経営の改善・充実に向けた会員相互の連携

工藤 靖夫（川口中）

##### 1 はじめに

岩手地区校長会の中学校部会は、八幡平市4校、滝沢市6校、平石町1校、葛巻町3校、岩手町3校、合計17校で構成されており、「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく力を育てていくための学校経営の改善・充実に向けて」を主題に、研究・研修の推進と会員相互の情報交換、親睦を深める活動を行っている。

##### 2 本年度の活動方針

- (1) 学校経営課題に対し、創造的で開かれた学校経営の改善と充実を図る。
- (2) 新学習指導要領の着実な実施と、教育課題を踏まえた研究や実践活動の充実を図る。
- (3) 教育諸条件に関する調査及び教育環境改善の具体化に係る活動の充実を図る。
- (4) 会員及び市町校長会相互の理解と連携強化を促進し、諸事業の充実を図る。

- (5) 地域及び教育関係機関・団体等との一層の連携強化を図る。
- (6) 東日本大震災の教訓を次世代につなぎながら、地域の実情に合わせた復興教育の一層の深化・充実を図る。
- (7) 新型コロナウイルス感染予防と学校教育活動の両立、進展する情報化への対応を推進する。

##### 3 本年度の主な活動内容

- (1) 地区中学校部会研修  
岩手県校長会生徒指導の諸問題に係る調査結果の考察及び各中学校における生徒指導上の諸問題に関する情報交換と対応についての検討。
- (2) 市町中学校部会研修  
研究テーマに基づいて、県や地区小・中校长会研究大会に向けた研究実践を推進する。

##### 4 おわりに

本地区は、5市町17校それぞれの環境や事情があり、異なる学校課題を抱えているが、児童生徒や保護者、地域の要請と期待に応えるため、会員相互の連携と経営実践の交流・研鑽を通して、自らの学校経営の力量の向上を目指し活動を進めている。

##### 3 本年度の活動内容

震災発災から11年が経ち、学校は新たなステージを迎えており、震災の教訓を活かして、学校を風化させない取り組みを続けていくことはもちろん、今後起こり得る災害に対して能動的に対応する生徒を育成することが急務である。また、少子高齢化や震災に伴う生徒数の減少により、各種事業の在り方についても問い合わせられているのが現状である。

- 学校経営研修会（年2回）と学校情報交換研修会（年2回）を開催し、積極的な意見交流により、自校の課題解決につなげている。
- 年に2回、地区内の県立校長との意見交換会を開催し、グラウンドデザインについて学びながら、自校の適切な目標設定に活かしている。
- 「ICTを活用した教育活動の推進と校長の関わり」を研究主題として、各学校の実践を交流し、より効果的な取組や校長の役割・関わり方を探っている。

##### 4 おわりに

2年半以上に及ぶ感染症対策により生徒や保護者、地域の方々との対話の機会も影響を受ける中、職員を活かす校長の強いリーダーシップが求められている。学校経営上の課題に臨機応変に対応するための術や体力を、会員相互の連携によって生み出していきたいと考える。

### 気仙地区校長会



#### 情報交換と連携から力を生む

及川 賢一（世田米中）

##### 1 はじめに

気仙地区中学校長会は、大船渡市4校、陸前高田市2校、住田町2校の計8校で構成されている。4月に3名の新入会員を迎え、会員相互の情報交換を密にしながら学校経営充実のために活動している。

##### 2 本年度の活動方針

- (1) 会員相互の連携と交流を密にし、本会の活動の充実とその活性化に努める。
- (2) 教育の目指す高い理想の実現に向け、保護者・地域住民と一体となった特色ある学校づくりに努める。
- (3) 研究・研修の充実を図りながら、校長としての見識・力量を高める。
- (4) 関係機関・団体との連携を図り、気仙地区教育の改善・充実に努める。
- (5) 学校における働き方改革の推進に努める。

## 「令和3年度における生徒指導の諸課題に係る調査」の概要

会員の皆様のご協力と生徒指導部地区担当者の皆様、そして、幹事の方々のご尽力により、令和3年度の本調査の「結果と傾向」をまとめることができました。心から感謝申し上げます。

9月5日には第2回地区担当者会議、小・中学校長会生徒指導情報交換会を開催し、概要を報告しました。

以下、調査結果の概要を紹介いたします。

### 1 各学校の生徒指導の状況

「問題行動があった」と回答した学校が58%（70校）、その中で「3件以上あった」と回答した学校が33%（34校）で、過去7年の中で最も高い数値である。

さらに、令和4年度の予想として、5割の学校で問題行動の心配があると回答している。各学校では、危機感をもって、生徒指導の充実を図る必要がある。

### 2 対教師・対生徒への問題行動

令和3年度の「対教師への問題行動」は26人で昨年度とはほぼ同数。「対生徒への問題行動」は、346人で過去7年の中で最も低い数値となった。特に「嫌がらせ・いじめ」は159件で、令和2年度の327件と比較すると半減している。その一方、生徒への暴力行為は190件で、35件増加している。

### 3 忠告等の問題行動

これまで減少傾向であった一般的の非行の生徒数が、令和2年度より増加傾向となっている。特に「喫煙」「飲酒」「夜遊び」「外泊」は、合わせると23件増加している。SNSでの繋がり、不登校等の実態も踏まえながら、非行防止の指導の充実を図る必要がある。

### 4 いじめ問題の状況

令和3年度のいじめの認知総数は1,120人。令和2年度に比べ、200人以上減少している。学年別では過去3年間と同様の傾向が見られ、1年生でのいじめの認知数が最も多かった。いじめの解決率は、どの学年もおよそ9割である。

いじめの態様は、例年同様「ひやかしやからかい」が最も多く、「暴力」「仲間はずし」等、他の態様に

比べ4倍以上ある。しかし、令和2年度と比べると約120件減少した。

効果的だった指導について、「生徒同士の人間関係の育成」の他、令和2年度に比べて10ポイント程度増加した項目は、「生徒会取り組み」「校内教育相談活動」「関係機関との連携」である。好ましい人間関係作りや組織対応の充実がうかがわれる。

### 5 不登校の状況

不登校生徒数は1,186名、全生徒数に占める出現率が3.98%（約4割）と増加し、過去最高となった。

最も多い理由が「神經症的な拒否」（33%）である。不登校生徒に対する指導の態様では、昨年度と同様「相談機関との連携」が最も多い。中・大規模校では「病院等の医療機関との連携」が80%以上である。

### 6 情報機器の利用

令和3年度の携帯電話・スマホの利用によるトラブルは、全国、岩手ともに微減している。しかし、依然として多く、生徒指導上の大きな課題である。

本県で多いトラブルは、「ネット依存」（47.3%）で最も高く、次いで「LINE等に関わるトラブル」（46.6%）、「ネットの書き込み」（41.8%）である。

トラブル防止策の1つである「生徒によるルール作り」は、岩手県では増加傾向にある。令和3年度は、全国30.1%に対し、岩手県43.8%で大きく上回った。全国では、何らかの条件付きで持ち込みを容認する動きも見える中、生徒によるルール作りの意義は一層高まっていくと思われる。また、GIGAスクール構想によるタブレットの家庭への持ち帰りが行われる中で、情報モラル教育も一層力を入れる必要がある。

### 7 児童虐待・クレーマー等

心理的虐待、身体的虐待が、それぞれ約14%で多く、ここ数年の傾向である。それを上回ったのが「モンスターべアント、クレーマー等で困っている（いた）」こと。今年度は15.1%となり、増加傾向にある。保護者対応に苦慮していることが推察される。

## (被災地支援) 横軸連携活動 —「田老を語り伝える会」を通して—

宮古市田老地区は、これまで何度も津波の被害を受け、その度に住民が力を合わせて乗り越えて来た歴史がある。本校も東日本大震災津波で大きな被害にあったが、各地区からの支援により通常の教育活動を再開し、生徒同士が交流できる場を設けていただいている。

### ■西根第一中学校との交流

平成23年の震災以降、クロス連携校である八幡平市立西根第一中学校との交流を続けてきた。本校の震災資料室「ボイジャー」の見学や学校紹介、運動部の合同練習、合唱発表、総合学習の発表などを通して心の交流を深めている。

今年は7月6日に両校の2学年で交流会を実施し、それぞれの防災に関する取組について発表した。内陸（火山）と沿岸（津波）で対象は異なるが、自然災害に対する備えや災害時の行動など、命を守るために私たちがすべきことを確認することができた。本校では「田老を語り伝える会」として、自分で調べたことや保護者アンケートをもとに、当時の様子や震災からの学びを発表した。



西根一中より  
花束贈呈

本校2学年の「宿泊研修」において盛岡市を訪問し、市内の5中学校（松園中学校、北松園中学校、米内中学校、下橋中学校、城西中学校）のうち1校と交流している。復旧・復興を支援してくださった感謝の気持ちを伝えるとともに、震災関連の表現活動を行なうことで、震災体験を風化させないための活動の一つとしている。

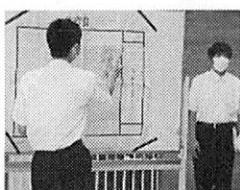
今年度は9月15日に松園中学校を訪れ、2年生どうしで交流した。震災時に地域で起きた出来事や当時の市民から聞き取ったことを発表し、グループ協議では防災・減災のために自分たちにできることや集団生活に大切なことについて、お互いの考えを率直に出し合った。



田老を語り  
伝える会



グループ交流



田老一中の  
発表

### ■横軸連携姉妹校（盛岡市）との交流

県中学校長会の支援体制の構築により、震災以降毎年盛岡市内の中学校との交流事業を続けている。

震災から11年以上が経過し、今の中学2年生でさえ当時の記憶はかなり薄い。教職員も震災体験者が少なくなっていく。こうした中、特に被災した学校においては、人と人との絆や交流、関わり合いがますます大切になる。私たち教員は使命感を強く持ち、郷土を愛し、その復興・発展を支える人材の育成に注力していくなければならない。そして、これまで培った横軸での連携・交流の価値を確かめながら、命の大切さや日常生活のありがたさ、お互いを思いやる心を、これから岩手の子供たちにしっかりと伝えていきたい。

## 令和4年度 沿岸被災地訪問（報告）

令和4年8月4日（木）・5日（金）に、岩手県中学校校長会常任理事及び事務局の10名が、沿岸被災地域の中学校を訪問して参りました。この訪問は東日本大震災以降、全日中学校長会と県中学校長会の役員が実施してきたものを継続して行なっているものです。今年度は沿岸北部地区を訪れました。詳しい訪問先は下表のとおりです。

この訪問では、各地区・各学校の校長から直接お話をうかがい、現在の状況を把握するとともに、県中学校長会組織としてどのような支援ができるかを考え、共に学校経営の充実を図ることを目的に活動しています。

国の整備による「三陸沿岸道路」が令和3年12月18日に完成し、宮城、岩手、青森の三県の太平洋沿岸を貫く総延長359キロの大動脈がつながるとともに、盛岡市と宮古市、花巻市と釜石市を結ぶ2つの横断道路も完成しており、以前に比べ移動にかかる時間などの労力はかなり軽減された。また土地のかさ上げや防波堤などの整備も進んでいることが見て取れたものの、以前の街の賑わいは感じられず、11年を超える歳月は、これほどまでに人々の暮らしを変化させるのかと思われました。



被災地訪問（久慈地区）



被災地訪問（宮古地区）

情報交換において、やはり人口減少及び少子化は大きな問題であり、インフラ整備は進んだものの、家庭における経済格差はむしろ大きくなつたように感じているとの話がありました。そのような状況ではあるが、学校では地域と連携しながら、「命を守る教育」「思いやりを大切にする教育」を通して、復興を担う人づくりに努めていること等の説明を受けました。少子化への対応については、ICT機器の活用により、学習面はなんとか対応できるが、部活動への影響は深刻であり、合同チームや地域移行などでも解決できず、多くの学校で苦慮している状況をうかがい知ることができました。

県中学校長会としては、これからも県内全ての中学校長が一枚岩となり、力を合わせ本県教育活動の充実に邁進していくためにも、今後も沿岸被災地訪問は継続してまいりたいと考えております。



被災地訪問（普代水門）

日 程	訪 問 先 等	同 席 者
8月4日（木）	○宮古市立第一中学校にて宮古地区校長会と情報交換 地区校長会長挨拶、地区校長会からの説明、震災当時の状況など ○宮古市立河南中学校にて宮古市教育委員会との情報交換 宮古市教育委員会の現況説明、会場校の活動状況の説明など	宮古教事 菊池教務課長 宮古市教委 伊藤教育長
8月5日（金）	○普代村立普代中学校にて久慈地区校長会と情報交換 地区校長会長挨拶、会場校の活動状況の説明など ○普代水門施設見学	普代中生徒会 執行部生徒3名